

鳥羽僧正覚猷と『鳥獣戯画』

今村みゑ子

基礎教育課程

Tobasojo Kakuyu and Choju Giga

IMAMURA Mieko

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 10, 2006 ; Accepted January 9, 2007)

はじめに

国宝にも指定されている絵巻『鳥獣戯画』（『鳥獣人物戯画』とも）の作者は不明であるが、その解説には必ず鳥羽僧正覚猷の名前が登場する。作者は鳥羽僧正である、と断言しているものから、作者に擬されている、と紹介するもの、さらには画僧の研究を踏まえた上で、甲・乙・丙・丁の全4巻のうち、12世紀ごろに作成されたと見られる甲・乙巻の作成には、覚猷が何らかのかたちで関与しているのではないかとする説まで、覚猷と『鳥獣戯画』は切っても切れない関係にあるのが現状である。

稿者は先に『鳥獣戯画』甲巻を対象に、「『鳥獣戯画』を読み解く一戯画の重層性、および「遊び」について」¹⁾と題して、説話・和歌・伝承などを通じて得られる情報により場面場面に込められた重層的戯画を指摘し、そのような戯画を作成した作者像にも思いを巡らせた。本稿は覚猷が作者か否かという結論を求めるものではない（それは確かな史料が発見されない限り言うことができない）。しかし、改めて、覚猷がなぜ作者と見做され続けているのかを探ってみたい。単なる伝承とするだけでは根強いその背景を説明するには不十分であろう。そこで、覚猷がどのような人物であるのかを確認して、絵巻の作者像と覚猷に底通するものがあるかどうか、あるとしたらそれは何なのか、考えてみることにする。

1. 『鳥獣戯画』覚猷作者説の背景

鳥羽僧正覚猷の名前に因んで名づけられた戯画「鳥羽絵」が登場するのは18世紀頃である。宝永7年（1710）の『寛闊平家物語』には、「近頃頃鳥羽絵といふもの、扇、襦紗にはやり出したるを見れば、顔、形、手足、人間にあらず、化け物づくしなり」とあり、京都を中心に扇や襦紗などに描かれた「鳥羽絵」と呼ばれる一種の漫画が人気を博していた。鳥羽絵は出版技術の発達により、

享保5年（1720）には大阪で『鳥羽絵三国志』・『鳥羽絵欠び留』・『軽筆鳥羽車』など、「鳥羽絵本」と呼ばれる戯画本として次々と出版された。

絵巻『鳥獣戯画』の作者を鳥羽僧正覚猷とする説がいつ頃から登場したのかは不明であるが、寛政4年（1792）、儒学者の柴野栗山らが山城・大和を廻って調査した『寺社宝物展覧目録』の高山寺の条には「鳥羽僧正筆絵巻四軸」と記されており、鳥羽絵が盛んに描かれた同時期に、覚猷を『鳥獣戯画』の作者とする説があったと知られる。

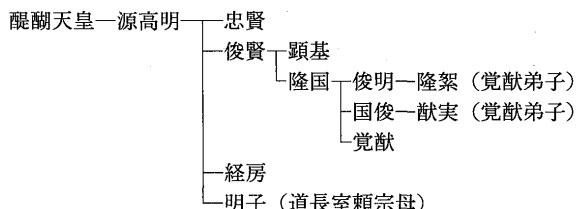
こうした説が浮上する背景には、鳥羽僧正が画僧で、それも面白い絵・戯画を描いたという認識があるからであり、それはおそらく『尊卑分脈』や『古今著聞集』あたりの情報によるものであろう。『尊卑分脈』の覚猷の注には「画図長」とあり、また『古今著聞集』「画図」395「鳥羽僧正絵をもって供米の不法を諷刺する事」には、「さまざまおもしろ筆をふるひてかかれたりける」とあるなど、単に絵が上手いというのみならず、面白い絵、諷刺画、戯画を描いたことが知られる。こうした史料が元となって、後世、戯画が鳥羽絵と称され、また、鳥羽僧正覚猷を『鳥獣戯画』の作者とする説が登場したものと推察することが可能である。

さて、こうした史料が残る鳥羽僧正覚猷について、その人物像を追究していくことにする。覚猷に関する史料は、大きく記録と説話に分けられる。記録は当時の公家日記のような1次史料および各種記録類を指す。説話は編纂者によって集められた話の集成であり、今日では文学のジャンルに入れているが、これもまた情報を伝えるものである。覚猷の話は『古事談』・『発心集』・『宇治拾遺物語』・『古今著聞集』・『溪嵐拾葉集』（1本）に載る。一人の人物としては採録された説話が多種で、注目度の高い人物であったと言える。

2. 覚猷の出自

覚猷は天喜元年（1053）に権大納言源隆国の子として生まれ、保延6年（1140）に88歳で没した。三井寺（園城寺）の僧である。出自は醍醐天皇の皇子源高明を祖とする醍醐源氏である。

主な関係人物を『尊卑分脈』の系図を中心にして示すと次のようになる。



覚猷の曾祖父高明は醍醐天皇の皇子として出生、8歳にして源姓を賜った（『類従符宣抄』）。時の権力者右大臣藤原師輔の女婿となって順調な出世の道を歩み、左大臣に至る。しかしながら村上天皇の後安子の所生で、皇位継承の条件を有する為平親王を婿にし、外戚ともなりうる立場に立ったことで、藤原氏摂関家の脅威となり（『大鏡』巻3など）、安和の変によって大宰権帥として左遷、配流となった。『かげろふ日記』が「あめのしたゆすりて」「おもひしりたる人は袖をぬらさぬといふたぐひなし」と記す、悲劇的な大事件であった。高明は故実書『西宮記』を著すなど優れた政治家であり、和歌は勅撰集歌人、琵琶は血脈に載り、逸話も多い風流才子でもあった。

高明配流時に11歳であった俊賢は、父親の懐にすがりついて泣いた（『栄花物語』「月の宴」）というが、やがて藤原道長の政権を支える優能な4人の大納言（『愚管抄』に「四納言」とある）の一人となる。高明の配流という逆境から身を起こした俊賢の処世は、巧みに道長に取り入り、謀略に満ちたものであったという。しかもそれは顕基・隆国という二人の息子達の栄達を思いやっていたことでもあった。藤原実資の『小右記』寛弘8年7月26日条には「就中俊賢如狂……貪欲謀略之聞共高之人也」と批判、万寿2年3月15日条には、「民部卿謀略尤高、左中將公成昇進替、以右中將顕基遷任、左少將隆国可任中將、顕基隆国戸部子也」と、息子達の昇進のために謀略を用いたと非難している。

こうした清廉ならざる俊賢の努力があって、顕基と隆国は順調な官途を歩む。しかし、顕基は中納言にまで至りながら、なぜか「心は此の世のさかえを好まず」、「罪なくして罪せられて配所にて月を見ばや」と言い、後一条院の崩御とともに三十代の若さにして出家を遂げてしまう（諸書に載る顕基出家説話から『発心集』を引用）。あたかも父の用意してくれた栄達に背を向け、祖父高明

の配流を慕うがごとき行動には、祖父と父の辿った宿命が影を投じているかのようである。

一方、顕基の弟である覚猷の父大納言隆国は、道長の子関白頼通の宇治殿に極めて小さな馬に乗って下馬もせずに入入りし、馬は足駄であるとうそぶいたという（『古事談』）。このような話は頼通と昵懇の間柄であったことを伝えると言われるが、それも裏返せば藤原氏に奉仕する立場に落とされた醍醐源氏の屈折した姿であるのかもしれない。また、人を食ったようなひょうきんな言動は、天皇の着替えの折、毎度玉茎をさぐり、冠を払い落とされたといった奇行（『古事談』）にも見られる。また、隆国は散逸した説話集『宇治大納言物語』の編者で、『宇治拾遺物語』の序文には、宇治で暑さをわび、髻を結び曲げ、庭に寝そべて往来の者を引きとめて話を聞き、それを書き留めたとある。一方で『安養集』のような仏教書も著しており、世俗・仏教の両面に幅広い関心を有し、才能豊か、機知に富み、奇抜で豪放な人物としての風貌が伝えられる。

覚猷は、後に見る説話によりこうした父隆国の性情を引き継いでいるものと思われる。また覚猷の背後に醍醐源氏の光と影はどのように映じているのだろうか。なお、覚猷の出生時隆国は50歳、覚猷25歳の時に没している。

3. 覚猷の経歴・事績

覚猷は『尊卑分脈』には次のようである。

寺、大僧正、天台座主、法務、護持、〔法輪院〕、寺〔三井〕長吏、覚円資〔弟子〕、画図長、号鳥羽僧正
 当時の僧の理想は、『宇治拾遺物語』60「進命婦、清水詣事」にうかがえるであろう。藤原頼通の妻となった進命婦こと藤原祇子は、師の僧から「俗を生まれ給はば、関白、摂政を生まれ給へ。女を生まれ給はば、女御、后を生まれ給へ。僧を生まれ給はば、法務の大僧正を生まれ給へ」と祈念され、「はたして京極大殿、四条宮、三井の覚円を生またてまつれりとぞ」と、そのとおりになったという。覚猷は奇しくもその頼通の子「三井の覚円」の弟子として、自身もまたこの「法務の大僧正」という、当時の「理想」の僧位を極め、覚円同様天台座主に至ったのである。しかし86歳の高齢であった。

事蹟を追ってみよう。僧歴については特に傍線を付す。なお、史料の所在については竹居明男「鳥羽僧正覚猷行実」²⁾を多く参照した。

20代、30代における事績から見る。承暦3年（1079）10月5日、27歳で法橋に叙される。『僧綱補任』によると、法成寺塔供養の賞における頼尋僧都の譲で、覚猷を修理別当となすため、とあり、経営手腕を期待されての叙位であった。さらには永保元年（1081）12月27日、29

歳で天王寺別当に任じられ（『僧官補任・天王寺別当次第』、『天王寺別当次第』・『寺門伝記補録』13、『三井続灯記』8）、13年間その任にあった。『三井続灯記』には、「白川院永保元年、三井覚猷法橋補任別当、于レ時堂塔荒廢、寺領転倒、荊棘茂レ庭、牛馬繫レ軒、執務十三年之間、莊レ嚴堂塔、直立レ寺領製二階之西門牒、四王之名額伽藍復レ昔、是覚猷改務之力也」とあり、荒廢した天王寺を復旧することに多大な功績を上げたという。早くから覚猷には寺の経営に関する能力があり、さらに天王寺の経営でそれを培ったものと言えよう。

一方、20代・30代には学僧としての事蹟も多い。承保元年（1074）22歳、『小栗栖請来目録』を書写（東寺蔵同写本奥書）。承保3年（1076）24歳、『求聞持法儀軌』の移点（東寺蔵同写本奥書）。承暦元年（1077）25歳、上定房阿闍梨より「南無宝鉢之手療腹病」法を受ける（『五十卷抄』第25）。承暦2年（1078）26歳、『禅林寺請来目録』を校合（東寺蔵同写本奥書）。承暦4年（1080）28歳、『仏説毘沙門天経』を行意に書写させて一校する（東寺蔵同写本奥書）。応徳3年（1086）34歳、『禅林寺請来目録』を比勘する（東寺蔵同写本奥書）。寛治5年（1091）39歳、『智証大師将来目録』を校合（東寺蔵同写本奥書）、また『熾盛光儀軌』の最初の校訂を行う（鳥海家蔵同写本奥書）。いつの時点か不明であるが、保安3年9月に、覚暹が覚猷加墨点本『俱摩羅金剛念誦瑜迦儀軌法』を書写校勘している（大東急記念文庫蔵同写本奥書）。

これらから、20代・30代には、寺の政務、特に13年にわたる天王寺の経営に力を入れるかたわら、学僧としての活動にも熱心であったことがうかがわれる。『溪嵐拾葉集』（一本）に「鳥羽僧正覚猷者、天下無双碩学、真言師」とあるのも、こうした学問によって裏付けられる。

ところが、40代、50代の事績を伝える史料は極端に少ない。それは、嘉保元年（1094）、42歳で天王寺別当を辞退するのだが（『僧官補任・天王寺別当次第』、『三井続灯記』8、『僧綱補任』、『僧綱補任』寛治8年（元号が嘉保元年に変わる）条に、「覚猷〈辞退天王寺別当、籠居本寺〉」とあり、理由は不明ながら、本寺、すなわち三井寺の法輪院に籠もったことと関わるのであろう。わずかに、堀河天皇の康和元年（1099）12月29日、47歳の時、宸筆金泥法華経を宇佐八幡宮に供養する勅使に定められ、翌年正月7日進発、2月7日供養を行ったことが知られる（『本朝世紀』、『中右記目録』）。

永久元年（1113）正月9日、61歳で法眼に叙され（『僧綱補任』）、この前後から法事において導師・講師を勤める記録が多くなる。天永2年（1111）59歳、2月20日、坊城堂で故源中納言国信（忠実室師子の兄弟）の法

事の導師を勤め（『長秋記』）、永久元年4月28日には師時家の尼上の法事の導師を勤める（『長秋記』）。永久3年（1115）63歳、4月3日、関白忠実の、故源麗子（忠実には祖母）正日の導師を勤める（『殿暦』）。10月13日、忠実の三条丈六堂供養の導師を勤める（『殿暦』）。永久4年（1116）64歳、6月20日、忠実再建の宇治池殿堂供養の導師を勤める（『殿暦』）。10月13日、忠実の仏事に北斗供を修する（『殿暦』）。元永元年（1118）66歳、7月2日、忠実の依頼で尊星王法を修する（『殿暦』）。元永2年（1119）67歳、8月16日、忠実息内大臣忠通の法成寺講堂御仏供養の導師を、尼公の塔下丈六阿弥陀仏供養の講師を勤める（『中右記』）。同10月7日、忠実・忠通に従い、宇治平等院御塔建立の地鎮の奉行を勤める（『中右記』）。保安元年（1120）68歳、6月28日、一条殿丈六阿弥陀仏供養の導師を勤める（『中右記』）。

以上により、60代は主として関白忠実とその関係者の法事・仏事を勤めており、忠実の信任が篤かったものと思われる。撰関家との結びつきは高明以来深いものがあり、父隆国が頼通に仕えて昵懇の間柄であったこと、またそれ故に覚猷が頼通の子覚円を師としたことなど、そうした結びつきが頼通の曾孫忠実への奉仕に繋がっていたのであろう。

ところがこの後、忠実関係はほとんどなくなり、白河院・鳥羽院との結びつきが強くなる。忠実の『伝暦』が元永元年（1118）までしか残らないという事情もあろうが、むしろ、保安元年（1120）に忠実が白河院に勅勤に処せられたことが少なからず影響しているのではないだろうか。とすれば、時の権勢に変わり身早く取り付くという、祖父俊賢にも似た処世に長けた一面をうかがい見ることになるだろうか。

保安2年（1121）69歳、10月6日、法印大和尚位に叙され（『僧綱補任』）、この頃から白河院・鳥羽院および待賢門院の関係が多くなる。

白河院寵愛の養女で、鳥羽天皇の中宮璋子は天治元年（1124）11月24日院号宣下があって待賢門院となるが、その璋子の御産に覚猷は終始御祈を勤めている。元永2年（1119）67歳、5月28日、中宮だった璋子の皇子顕仁（崇徳）誕生、尊星王法を修する（『御産御祈目録』）。天治元年（1124）72歳、5月24日、尊星王法・焰魔天供を修し、28日に皇子（通仁）誕生（『御産御祈目録』『永昌記』）。天治2年（1125）73歳、5月、尊星王法・焰魔天供を修し、24日皇子（君仁）誕生（『御産御祈目録』）。大治元年（1126）74歳、5月、八字文殊法・焰魔天供・金剛童子供・最勝太子供を修する（『御産御祈目録』）、7月に統子（上西門院）誕生。大治2年（1127）75歳、9月、尊星王法・焰魔天供を修し、11日に皇子（後白河）

誕生（『御産御祈目録』、『中右記』）。

また、六勝寺の灌頂の大阿闍梨を勤める記録も多い。保安3年（1122）70歳、12月15日、鳥羽天皇の御願寺である最勝寺に初めて灌頂が置かれると、職衆の一人となる（『僧綱補任抄出』）。天治2年（1125）73歳、12月22日、最勝寺灌頂の大阿闍梨を勤める（『彰考館本僧綱補任』、『中右記目録』）。大治元年（1126）74歳、5月2日、梵釈寺・尊勝寺・最勝寺の灌頂の大阿闍梨に補される（『彰考館本僧綱補任』）。大治2年（1127）75歳、4月27日、尊勝寺灌頂の大阿闍梨を勤める（『中右記』、『彰考館本僧綱補任』）。12月30日、阿闍梨宣旨の下された18人の一人である（『中右記』）。

さらに、白河院の仏事への参仕が多くなる。大治2年（1127）75歳、9月2日、白河院（三条西殿）の観音経転読僧百口のうち（『中右記』）。9月22日、東三条殿に院の御幸あり、御修法に北斗法を修する（『中右記』）。その効験の賞により、9月29日、覚猷の法輪院に阿闍梨3口を置くべき宣旨が下る（『中右記』）。大治4年（1129）77歳、5月13日、白河院、覚猷に法華法を修させる（『中右記』・『長秋記』）。5月17日、白河院、新三条殿において覚猷に法華法を修させる（『中右記』）。6月4日、東三条において覚猷の行う法華法結願に、白河・鳥羽両院御幸（『中右記』）。6月26日 両院三条角殿に御幸、覚猷に丈六尊星王を供養させる（『長秋記』）。

また、白河院の近臣藤原顕隆とその兄である為隆の仏事にも参じている。大治2年（1127）、10月17日、為隆建立堂供養の導師を勤め（『中右記』）、翌月11月18日には、顕隆建立八条堂供養の導師を勤めている（『中右記』）。顕隆は忠実失脚後、「天下之政、在_レ此人一言_一也、威振_一一天_一、富満_一四海_一」（『中右記』大治4年正月15日条）、また「夜の関白」（『今鏡』二 釣せぬ浦々）と言われるほど権勢を振るった近臣であり、ここにも覚猷の時勢に乗じた活躍がうかがわれる。

このように白河院との結びつきを強めた覚猷は、大治4年（1129）77歳で、7月7日、同齡の白河院の死を御前僧として看取ることになる。『中右記』に「女院、新院、仁和寺大宮、山座主、法印覚猷候_一御前_一、此巳時許_一令_レ崩_一給了_一、『長秋記』に「及_レ巳始、時々女院拳_一哀声_一、聞_一二品三品両法親王念誦_一、僧正仁実誦_一不動呪_一奉_一加治_一、法印覚猷付_一御耳_一唱_一御宝号_一、長実脚打_一磬近候、及_一巳一刻_一之間、氣絶眼閉、人皆悲泣、于_レ時御在所三条殿西対北面_一、また『永昌記』に「大僧正行尊座主仁実等御加持、法印覚猷自_一鳥羽_一馳参」とある。すなわち、崩御を看取ったのは、待賢門院璋子、鳥羽院、白河院皇子の仁和寺の覚行・覚法法親王、また璋子の兄弟である座主仁実等、ごく身内の者と覚猷・行尊であっ

た。覚猷は鳥羽から駆けつけ、院の耳で弥陀の宝号を唱えて往生を祈ったのである。

8日の入棺に際する装束や儀式などは全て覚猷の指導によって執り行われており（『長秋記』）、白河院と深い関係にあったのみならず、覚猷がそうした儀式的故実・知識に通じていたことを知ることができる。15日の葬送の儀には呪願を勤め、御所で阿弥陀護摩法を修する（『中右記』、『長秋記』、『永昌記』）。16日の納骨には土砂加持を勤め、また本御所で阿弥陀護摩を修する（『長秋記』）。20日の二七日の仏事には院御等身阿弥陀尊像御経等供養に勤仕（『永昌記』）。22日には、故院の装束などが、御前僧である覚猷等や護摩僧、香隆寺僧、例事僧らに分賜された（『中右記』）。

この後、7月26日、崩御に伴い、白河院の皇女で鳥羽院の准母、皇后宮令子が出家するが、覚猷はその戒師を勤めている（『中右記』、『長秋記』、『永昌記』）。さらに中陰仏事には、閏7月4日、崩御四七日の新宰相長実仏経供養に導師を勤める（『中右記』、『永昌記』）。同11日、五七日の鳥羽院法事に呪願を勤める（『中右記』）。同18日、六七日の法事に導師を勤める（『中右記』）。同20日、法勝寺における中陰法事に導師・呪願を勤める（『中右記』）。同25日、法勝寺における四十九日の法事に講師・呪願等を勤める（『中右記』）。

覚猷の白河院への奉仕は院の崩御によって幕を閉じるが、引き続き鳥羽院・待賢門院の仏事に奉仕して、覚猷は昇進の一途を辿ることになる。白河院崩御の翌年、大治5年（1130）正月14日、78歳で権僧正に叙される（『中右記』、『僧綱補任』）。『中右記』に「僧事、権僧正覚猷_一元法印未歴正員、是遍昭僧正元慶三年例也、近代初例歟」とあり、それは法印の歴を満たさずして、遍昭の例に倣った異例の叙位であった。正月28日、慶賀を申している（『中右記』）。

同大治5年6月24日、白河新阿弥陀堂（蓮華蔵院）中塔供養の導師を勤める（『中右記』、『長秋記』）。7月2日、故院一周忌法事の白河新阿弥陀堂供養の講師・呪願を勤める（『中右記』）。7月7日、法勝寺阿弥陀堂における故院正日法事の呪願を勤める（『中右記』）。12月3日、白河院皇女前斎院禎子内親王五十講結願に10口を率いて曼荼羅供養をさせる（『中右記』、『長秋記』）。天承元年（1131）79歳、6月8日、待賢門院の仏事に鳥羽院の御幸もあり、鳥羽北殿にて尊星王法を修する（『長秋記』）。7月8日、鳥羽泉殿の跡に故法皇御所三条殿西対を移築し、この日、御堂（成菩提院）供養。覚猷始め散衆30口全員園城寺僧。覚猷は導師を勤め、成菩提院の別当に任じられ（『僧綱補任』には証金剛院別当とあるが間違いか、『百練抄』同日条に成菩提院とある）、『長秋

記』に、「先之頭弁仰別当供僧等、別当権僧正覚猷、供僧良修〈家実子〉、猷実〈国俊子〉」とあるように、供僧には覚猷の兄国俊の子が任じられている。この年には桓武天皇勅願、園城寺末寺梵釈寺の別当に任じられ（『僧綱補任』）、また尊勝寺灌頂の大阿闍梨を勤める（『彰考館本僧綱補任』）。

長承元年（1132）80歳、2月26日、鳥羽院の御願寺法号勘文5通を関白忠通に奉ったのは、仁和寺宮二人、僧正二人行尊・覚猷、山座主であった（『中右記』）。2月28日、再建された法成寺両塔供養の呪願を勤める（『中右記』、『彰考館本僧綱補任』）。3月13日、鳥羽院御願の白河千体観音堂（得長寿院）供養の呪願を勤め、開眼は覚猷が行っている（『中右記』、『彰考館本僧綱補任』）。5月27日、僧正に叙される（『中右記』、『僧綱補任』）。10月3日、院の御修法結願を勤める（『中右記』）10月7日、鳥羽院御願の白河九体丈六新阿弥陀堂（宝莊嚴院）供養の呪願を勤める（『中右記』、『彰考館本僧綱補任』）。

長承2年（1133）81歳、正月6日、法勝寺権別当に任じられる（『興福寺本僧綱補任』）。正月17日、鳥羽院の法勝寺千僧御読経に列する（『中右記』）。2月16日、待賢門院の八幡御塔供養に導師を勤める（『中右記』）。4月15日、鳥羽院の皇女である前斎院（統子）の病の祈りを鳥羽院により得長寿院に行い、『中右記』同日条に、「千体観音堂靈驗、僧正効驗又以掲焉也、雖末代不可思議歟、万人随喜」と記されるほどの効驗があった。覚猷はその勸賞を兄故俊明の子で弟子の隆架に譲り、隆架が権律師に任じられた（『長秋記』、『僧綱補任』）。

この年6月、あるいは7月ともあるが、院宣により覚鑊に灌頂を受けた。覚鑊は真言僧であるから、当然三井寺の反対があり、覚猷はそれを考慮して鳥羽九体阿弥陀堂（成菩提院）で行ったという（『大伝法院本願上人靈端並寺家縁起』下、『伝法院本願覚鑊上人縁起』、『密嚴上人行状記』中、『結網集』上、『密宗年表』、『寺門伝記補録』13、『園城寺伝法血脈』、『元亨釈書』5）。覚鑊は後、円明寺（根来寺）を建てて鳥羽院の御願寺とするに至る。院宣を下したのも鳥羽院の覚猷に対する信任の厚さと尊崇の現れと言える。

長承3年（1134）82歳、2月17日、法勝寺における金泥一切経供養に呪願、御幸・行幸があった（『中右記』、『長秋記』、『僧綱補任』第6裏書）。3月26日、院御幸、法勝寺千僧御読経（『中右記』）。3月29日、尊勝寺灌頂の大阿闍梨を勤める（『中右記』、『彰考館本僧綱補任』）。6月19日、鳥羽御堂建立に関して前太相国忠実が覚猷に尋ねたところ、鳥羽西岸は東方に崩れ寄っており、御堂は水の底に沈むことになると答えたという（『中右記』）。6月25日、得長寿院にて待賢門院の御惱を加持、鳥羽院

も御幸あり（『中右記』、『長秋記』）。閏12月5日、大僧正に叙される（『中右記』、『僧綱補任』）。閏12月7日、最勝寺灌頂の大阿闍梨を勤める（『彰考館本僧綱補任』、『中右記』）。閏12月20日、仁和寺法金剛院御塔の建立位置について意見を問われる（『長秋記』）。閏12月21日、法成寺別当に任じられる。（『僧綱補任』）

保延元年（1135）83歳、正月17日、法金剛院塔・経蔵の位置について意見を述べる（『長秋記』）。3月24日、尊勝寺灌頂の大阿闍梨を勤める（『中右記』、『彰考館本僧綱補任』）。3月29日 鳥羽院皇子（後の道恵）を弟子とする（『長秋記』）。4月28日、両院御幸、得長寿院において図絵丈六百体観音供養（『長秋記』）。5月5日、法勝寺にて院の大般若経供養（『長秋記』）。7月3日、法勝寺別当に任じられる。（『僧綱補任』）9月22日、法務に任じられる（『僧綱補任』、『中右記』、『長秋記』）。この年冬、園城寺長吏に任じられる。（『園城寺長吏次第』、『僧官補任・園城寺長吏次第』、『寺門伝記補録』13）。

保延2年（1136）84歳、正月、待賢門院の御願寺である円勝寺別当に任じられ（『彰考館本僧綱補任』）、同18日、鳥羽院の御願寺である宝莊嚴院別当に任じられる（『彰考館本僧綱補任』）。正月19日、鳥羽御堂（勝光明院）供養の僧名について審議があり、仁和寺両親王、大僧正覚猷、僧正忠尋等の名が挙がる（『中右記』同日条）。3月23日、鳥羽御堂供養に呪願（『中右記』）。しかし、この頃から高齢であることもあり、倦むところがあったのだろうか、3月、あるいは4月ともあるが、大僧正・法務を辞退する（『僧綱補任』、『彰考館本僧綱補任』、『歴代皇紀』）。

保延4年（1138）86歳、5月には、園城寺長吏を辞退する（『歴代皇紀』3裏書）。6月、去る保延元年に弟子とした鳥羽院皇子（道恵）出家の戒師を勤める（『一代要記』戊集）。10月27日、第47代天台座主に任じられ（『天台座主記』、『僧綱補任』、『寺門伝記補録』13）、天台宗の最高位に至る。しかし、29日に任3日で辞退。辞退の背景には、『校訂増補天台座主』²⁹に「寄山門大衆騒動勅使不登山」とあり、山門派の反対が激しかったことがうかがわれ、『本朝高僧伝』巻12にも「蓋避山徒之瞋也」と記される。しかしこれは覚猷に限ったことではない。寺門派の座主は、第20代の餘慶が山僧の反対に合い3ヶ月で辞退に追い込まれて以降、29代明尊が歴3日、31代源泉が歴3日、覚猷の師である34代覚円が歴3日、39代増誉が歴2日、44代行尊が歴6日と、ほとんど山門によって辞退に追い込まれることが恒例化していた。

保延6年（1140）88歳、9月15日入滅（『天台座主記』、『寺門伝記補録』13、『歴代皇紀』3裏書）。

以上の経歴・事績についていくつか注目される点を挙

げよう。

1点目。法印に叙されて以降、70歳、80歳代晩年の昇進と要職歴任が目覚しい。これは保安元年忠実が白河院によって内覧を留められ、宇治に隠棲した時期にあたり、撰関家への奉仕から白河院・鳥羽院への奉仕に移行した頃から、すなわち院政の主たちによって絶大な信頼と尊崇を受け、長生きも手伝って時勢を得たことを物語る。その撰関家離れは、処世に長けた一面を伝えるのであろうか、あるいは醍醐源氏としての自尊心を物語るものであろうか。

2点目。20代・30代の早くから寺の経営手腕に富んでおり、後年も院政の主たちから寺の建立に関して配置や地勢などの意見を求められており、そうした実務面でも覚猷が知識・能力を有していたことが知られる。また、学僧としての業績もあり、後年盛んに仏事を行い、儀式・故実に深く通じた高僧となるのもそのような学問のたまものである。

3点目。40代・50代においては公の活動を見せず、法輪院に籠居していたことは何を意味するのであろうか。何らかの不本意や不如意な思いを抱えていたのであろうか。長生きをしたからこそこの後の高位・要職が目立つのであるが、50代で早世していれば覚猷はほとんど無名で終わるに違いない。壮年期の20年近い籠居と沈黙は気になるところである。覚猷という人物の胸中に何があったのか、一筋縄ではいかない複雑な心性をもった人物であることの現れであるのかもしれない。

4点目。天台座主、任3日という事態は山門派による寺門派の圧迫だった。すでに高齢であった覚猷に未練はなかったとも推察される。しかし、繰り返されてきたこうした僧界の権力闘争を覚猷はどのように感じていたのかが気になる。

4. 絵画関係

『尊卑分脈』には「画図長」とある。絵に関する記録を挙げよう。いずれも『長秋記』の記事である。覚猷は記主源師時とは交流もあり、大治5年(1130)11月22日条には仏画に関しての話が記されている。

此後向_二権僧正坊_一、被_レ羞_レ膳閑談間、多是絵事也、仏彩色ニ有_二謂朝霞滅紫之事_一、是大師渡_二唐土_一渡_二諸仏像_一給時、令_二習伝_一給事也、謂朝霞、色上以_二金銀泥薄_一キラセル也、雖_二滅紫_一、薄色上以_二濃色_一ヲ取也、雖_二無_一指事、詳無_二知人事_一也、

師時は覚猷の坊に向かい、多く絵のことについて閑談した。仏画の彩色の「朝霞滅紫」は、智証大師円珍⁹⁾が渡唐して諸仏像を将来した時習い伝えたもので、「朝霞」とは色の上に金泥・銀泥の箔を散らすことで、紫をさめ

た色のようにしてしまうが、薄い色の上に濃い色をもってすると述べ、さしたることはないが詳しく知っている人はいないと、覚猷が語っている。円珍は智証門徒の覚猷にとって寺門派の祖師。寛治5年(1091)には覚猷は『智証大師将来目録』を校合するなどしており、そうした勉強が、このような仏画・仏像に対する造詣の深さとなったことが知られる。覚猷が仏画に通じた絵描きであったことを示すものである。

保延元年(1135)6月21日条には「申云、扉絵誰人可勤仕哉、仰云、覚猷大僧正称老屈者、可召仰頼俊者」とある。御堂(鳥羽勝光明院)の扉絵を描く候補に挙がるが、覚猷は老屈と称して辞退しているので、頼俊を召すべきである、とある。同7月21日条に「仁和寺扉事可語大僧正」とあり、鳥羽院から師時は、待賢門院の建立した仁和寺法金剛院の扉絵のことを覚猷に相談するように指示されている。翌22日条には「向鳥羽僧正壇所、女院扉事可奉凶進者」とあり、師時は前日の鳥羽院の仰せを受けて鳥羽に行き、覚猷の壇所に赴いて待賢門院仁和寺の扉絵を描いてまいらすべきことを覚猷に伝えている。その翌々日の24日条には、「参女院、僧正扉絵事申返事」とあり、師時は待賢門院に参り、扉絵の事についての覚猷の返事を伝えている。

当時、鳥羽院御願の鳥羽勝光明院の建立と、大治5年に落慶供養成った待賢門院の仁和寺法金剛院に新たに塔や経蔵等を建立することが同時に行われており、覚猷が両方の扉絵の作者の候補になっていたことを伝えている。勝光明院の方は断ったようであり、仁和寺の方の返事は諾否が不明である。ただ、覚猷が絵師としても高名であったことを十分に伝える史料である。

他に、覚猷の画業を伝える史料には、永久2年(1114)62歳、9月中旬に『胎蔵旧図様』を応源に模写させ、梵漢両字を覚猷が書写していること(同写本奥書)。また、保安元年(1120)7月26日以前に、法橋時代に覚猷が潤色して写した『八大明王図像』写本が書写されている。すなわち、醍醐寺蔵良慶写本・宗実写本両本の『八大明王図像』奥書に、「保安元年七月二十六日以前唐院伝本令写了、山座主仁毫為律師之時、以忠豪供奉令写本也、其後三井寺覚猷法橋潤色所被写也、彼忠豪筆疎故也」とあり、座主仁毫が忠豪に写させたものが粗悪であるとして、覚猷が潤色して写したものだという。また、醍醐寺には「鳥羽僧正御房之写タル也。一定也」という極書きのある、鎌倉時代の「不動明王図」が残る。

この他、覚猷が図像類を蒐収したことを証するものとして、佐和隆研「鳥羽僧正覚猷とその周辺」⁹⁾によると、尊勝曼荼羅図(『別尊雜記』巻8)、仁王経五方諸尊図(『覚禪抄』巻26、醍醐寺・東寺写本)、虚空像図法務御

図(『覚禅抄』巻44)、胎蔵図像二巻(文化財保護委員会蔵)、胎蔵旧図様1巻(武藤金太氏蔵)、焰摩天曼荼羅図(『阿婆縛抄』144巻)などが挙げられ、覚猷の名前は無いが、その房である法輪院に伝わる本に関わるものに、三十七尊三昧耶形一卷(醍醐寺蔵)、不動明王像一幅(醍醐寺蔵)、如意輪観音像(観智院本仏菩薩図像)、護摩壇様一卷(観智院蔵)、童子経曼荼羅図(『別尊雜記』巻13)、弁財天女像(『別尊雜記』巻44)などが挙げられている。

以上、覚猷が堂塔の扉絵を描くにふさわしい絵師であること、仏画に通じていること、図像類を図写したり、蒐収したりしたなど、仏画に深く関与していたことが知られる。

5. 説話に見る覚猷

説話は口承・書承を基にした逸話である。実録の要素の強いもの、編者の成文化の度合いの高いもの、伝承過程で多少の虚構が混じるものなどさまざまである。しかしながら、そのようにして残された複数の逸話を付き合わせることによって、そこに実在人物をある程度まで復元することが可能である。記録類ではなかなか伝えられない息づかいのようなものは文学の領域に残る。説話作品の成立順に、覚猷を見ていこう。

①『古事談』僧行269「覚猷、臨終の処分之事」

覚猷僧正臨終の時、処分すべき由、弟子等勧めけり。再三の後、硯紙等を乞ひ寄せて書きけり。その状に云はく、「処分は腕力によるべし」と云々。遂に入滅しけり。その後、白河院この事を聞こしめし、房の中にしかるべき弟子後見などを召し寄せて、遺財等を注せしめ、えしもいはず分配し給ひけりと云々。

『古事談』は源頭兼により鎌倉前期、1212～1215年頃に成立した。覚猷没後70年ほど後である。この話の出典は明らかではないが、『古事談』には出典の明示されたものも多く、それらの検証から頭兼の私意を加えない記録態度が指摘されている⁹⁾。ただし、「白河院」は覚猷より先に没しているので、院が処分を行ったのなら、それは「鳥羽院」ということになる。

さて、覚猷が臨終の時、房の遺産処分を遺言状に書くよう、弟子たちに再三勧められてようやく硯と紙を取って何か書いた。そこには「処分は腕力によるべし」とあった。遺産処分は覚猷の房である法輪院に関するものということになるであろう。通常、寺院においても遺産処分は遺言状・譲状によってなされる。よって死に臨んでその処分状がないというのは覚猷の不用意、もしくは無責任であり、弟子たちには極めて不都合で迷惑なことであ

る。しかし、奇抜な遺言状からすると、覚猷は自分の非を認めるところか弟子たちに対して挑戦的である。

むしろ覚猷はあえて遺書を残さなかったと見るべきである。遺産にこだわることは、仏教が戒めるところの欲望である。覚猷にはそうした認識があったのだ。それなのに弟子たちは仏教の戒めを忘却しているところか、師の死、あるいは一人の人間の死を前に、極楽往生を祈ることさえも忘れて、関心事はひたすら遺産相続であった。覚猷自身は白河院崩御に際し、3節に見たようにその耳元で弥陀の宝号を唱えて往生を祈った。師としては、弟子が自分の死を悲しんだり、成仏できるように祈らないということ以上に、導いてきた弟子の所業であることに不本意を感じたものと思われる。臨終間際の人間にそのような思考能力があったということには誇張もあろうが、この遺言状は弟子への批難であると同時に最後の訓戒としての意味をもつものでもあったと解される。

この話において、弟子たちが「腕力によるべし」との遺言状どおりに振舞うとすれば、遺産を奪い合って取っ組み合いの争いをする図になる。視覚的にイメージにすればまさに戯画、それも風刺画ができあがろう。絵師である覚猷にふさわしい。

では、覚猷のしたことは賞賛されるべきことであらうか。結局「白河院」、事実であるなら「鳥羽院」の登場となり、関係者を呼んで遺財の目録を作り、妥当な処分を行った。つまり、いかに遺産への執着が仏教に反するものであっても、実際は僧の世界もシステムは世俗と同じ図式なのであり、覚猷の考えも振る舞いも尋常ではないのである。ただ、院は覚猷の真意を理解したからであろう、その俗事を請け負ってやった。覚猷を尊崇し、皇子道恵を託した鳥羽院であれば、事実として十分に成り立つ話ではある。

この話に見るべきは、通常の人間からすれば常識を超えた覚猷の奇行である。しかしそれは単なる奇行ではなく、その根底には、仏教に照らした俗物性への批判精神があろう。そしてそれを無言のうちに戯画、諷刺画のイメージにして心のどこかで笑い飛ばす、覚猷は、機転とユーモアの利いた奇抜な発想の持ち主であると言えよう。

②『発心集』巻2「真浄房、しばらく天狗になる事」

近来、鳥羽僧正とて、やむごとなき人おはしけり。其の弟子にて、年来同宿したりける僧あり。名をば真浄房とぞ云ひける。往生を願ふ心深くして、師の僧正に聞こえける様「月日にそへて後世の恐しく侍れば、修学の道を捨てて、ひとへに念仏をいとなまむと思ひ侍るに、折りよく、法勝寺の三昧僧あきて侍り。かしこに申しなし給へ。身を非人になして、彼の三昧の事に命を續いで、後世を取り侍らん」と

聞こえければ、「かく思ひ取り入る、あはれなり」とて、則ち申しなされけり。

其の後、本意の如くのどかに三昧僧坊に居て、ひまなく念仏して月日を送る。(中略)

かかる程に、彼の僧正病ひをうけて、限りになり給へる由を聞きて、真浄房訪ひにまうでたりけり。ことのほかに弱くなりて、臥し給へる処に呼び入れて、「年来むつまじう思ひならはせるを、此の二三年うとうとしくなれるだに恋しく覚えつるに、今、長く別れなむとす。今日やかぎりならむ」と云ひもやらず泣かれければ、真浄房、いとあはれに覚えて、涙をおさへて「さなおぼしめしそ。今日こそ別れ奉るとも、後世には必ずあひてつかうまつるべきなり」と聞こゆ。「かく同心に思ひけるこそ、いとどうれしけれ」とて臥し給ひぬれば、泣く泣く帰らぬ。其の後、程なく僧正かくれ給ひにけり。(中略。こうして何年か経って真浄房は必ず往生するだろうと誰もが思い込んでいたところ、不可解なことに物に狂った様子になって死んだ。周囲の人々が納得できないことだと思っていたところ、年老いた母親に真浄房の霊が取り付いた。)

此の母が云ふ様「我は、ことなる物の怪にあらず。失せにし真浄房がまうで来たるなり。我がありさまを、誰も心得がたく思はれたれば、且は其の事をも聞こえんとなり。我、ひとへに名利を捨てて、後世の勤めよりほかにいとみなかりしかば、生死にとどまるべき身にてはなきを、我が師の僧正の別れを惜しみ給ひし時、『後世には必ず参り合うて随ひ奉らむ』と聞こえたりし事を、今、券契の如くして、『さこそ云ひしが』とて、いかにもいとまを給はせぬによりて、思はぬ道に引き入れら侍るなり。ひとへに仏の如く憑み奉りしままに、ゆゑなき事を申して、かく思ひのほかなる事こそ侍りつれ。但、天狗と申す事はある事なり。来年、六年に満ちなんとす。彼の月めに、かまへて此の道を出でて極楽へ詣らばやと思ひ給へるに、必ずさはりなく苦患まぬかるべき様にとぶらひ給へ。さても、世に侍りし時、『本意の如くおくれ奉るならば、母の御ため善知識となりて、後世をとぶらひ奉らむ。もし又、思ひのほかに先立ち参らせば、引撰し奉らん』とこそ願ひ侍しか。思はざるに、今かかる身となりて、近付きまうで来るにつけても、悩まし奉るべし」とは云ひもやらず、さめざめと泣く。聞く人、さながら涙を流してあはれみあへり。(中略。そこで人々が供養の限りを尽くしたところ、また真浄房が母親に取り付いて極楽往生を遂げた証拠を見せた。)

其れを聞く人、「たとひ行徳高き人なりとも、必ず是に値遇せんと云ふ誓ひをば起すまじかりけり。彼は取りはづして悪しき道に入りたれば、あへなくかかるわざなり」とぞ云ひける。

『発心集』は『古事談』成立と同じ頃、鴨長明によって編纂された。これも出典は明らかではない。しかし、覚猷が真浄房の法勝寺の三昧僧にしてくれとの頼みを聞いてやった背景には、3節に見たように、覚猷が白河院の御願寺である法勝寺の別当に任じられた故に可能であったろうし、その頃覚猷は81~83歳であるから、5年後の88歳で死ぬ時にこの話のようなことがあったとしても矛盾はない。

さて、『古事談』の弟子たちと『発心集』の弟子真浄房の違いに対する覚猷の対応の違いが覚猷の人物像を浮き彫りにする。『古事談』の弟子たちとは対照的に、真浄房は純粋な道心者である。それ故覚猷は三昧僧にしてやるなど協力的である。そして最期の床に伏せる覚猷に対し、真浄房は涙を流して別れを悲しみ、後世(無論、意とするところ極楽である)にお会いします、と言うなど、理想的な態度であった。時系列に並べれば、『古事談』の臨終時の話はこの後のことになる。なればこそ、『古事談』の、遺言状を書くようにと勧める弟子たちの態度は、覚猷にとって気に入らないことであつたに違いない。

この話は覚猷が天狗道に堕ちたという、驚くべき情報である。天狗道とは『比良山古人霊託』に「憍慢心、執着心の深き者、この道に来るなり」とあり、院や関白や高僧も天狗道に堕ちたとある。また、幸若『未来記』に「昔は人にて候ひしが、仏法をよく習ひ、我より外に智者なしと大慢心を起す故、仏にはならずして天狗道へ落つるなり」とある。覚猷は「行徳高き人」と認められながら、天狗道に堕ちるような「憍慢心」や「仏法をよく習ひ、我より外に智者なしと大慢心を起す」要素をもっていると思はされる人物でもあつたのだ。

この話を先の『古事談』につき合わせるならば、臨終に弟子たちの欲心を見逃せないのは仏法に通じている故である。しかし、臨終の遺言状の奇抜な内容は本人が極楽往生するためにはいかにも不都合なもので、それを慢心と見ることができ、『古事談』の話の中にすでに天狗道に堕ちる要素は認められるのである。

またこの話において、覚猷の真浄房に対する偏愛や執着といった人間的な側面、それゆえに、天狗道に真浄房を引きとめようとした自己中心的な我執の強さなども認められる。

③『宇治拾遺物語』37「鳥羽僧正、国俊と戯れの事」

是も今は昔、法輪院大僧正覚猷といふ人おはしけ

り。その甥に陸奥の前司国俊、僧正のもとへ行て、「参りてこそ候へ」といはせければ、「唯今、見参すべし。そなたにてしばしおはせ」とありければ、待居たるに、二時斗まで出あはねば、なま腹だたしうおぼえて、出なんと思て、共に具したる雑色をよびければ、出来たるに、「沓持て来」といひければ、もて来たるをはきて、「出なん」といふを、此の雑色がいふやう、「僧正の御房の『陸奥殿に申たれば、「疾う乗れ」とあるぞ。其車、率て来』とて、『小御門より、出ん』と仰事候つれば、やうぞ候らんとて、牛飼の者、たてまつりて候へば、『待たせ給へと申せ。時のほどぞあらんずる。やがて帰来んずるぞ』とて、はやうたてまつりて、出させ給候つるにて候。かうて、一時には過候ぬらん」といへば、「わ雑色は不覚のやつかな。『御車をかく召しのさぶらふは』と、我にいひてこそ、貸し申さめ。不覚也」といへば、「うちさしのきたる人にもおはしませず。やがて御尻切たてまつりて、『きときと、よく申したるぞ』と仰事候へば、力及候はざりつる」といひければ、陸奥の前司、帰のぼりて「いかにせん」と思まはずに、僧正はさだまりたる事にて、湯舟に藁をこまごまときりて、一はた入て、それがうへに箆を敷きて、ありきまはりては、左右なく湯殿へ行て、はだかに成て、「えさい、かさい、とりふすま」といひて、湯舟にさくとのけざまに臥事をぞし給ける。

陸奥前司、よりにて箆を引あげて見れば、まことに藁をこまごまと切り入たり。それを湯殿の垂布をときおろして、此藁をみなとり入て、よくつつみてその湯舟に、湯桶を下にとり入れ、それが上に囲碁盤をうら返してをきて、箆を引おほひて、さりげなくて、垂布につつみたる藁をば、大門の腋にかくし置て、待るたる程に、二時余ありて、僧正、小門より帰音しければ、ちがひて、大門へ出て、帰たる車よびよせて、車の尻に、このつつみたる藁を入て、家へはやかにやりて、おりて、「此藁を、牛のあちこちあるき困じたるに、食はせよ」とて、牛飼童にとらせつ。

僧正は例の事なれば、衣ぬぐ程もなく、例の湯殿へ入て、「えさい、かさい、とりふすま」といひて、湯舟へおどり入て、のけざまにゆくりもなく臥したるに、碁盤のあしのいかりさしあがりたるに、尻骨をあらうつきて、年たかうなりたる人の、死入て、さしそりて臥たりけるが、其後、音なかりければ、ちかうつかふ僧、よりにて見れば、目をかみに見つけて、死入て、寝たり。「こは、いかに」といへど、いらへもせず。よりにて顔に水ふきなどして、とばか

りありてぞ、息のしたに、おろおろいはれける。

このたはふれ、いとはしたなかりけるにや。

この話は国俊を覚猷の甥とするところが史実に反している。実在の国俊は覚猷の兄に当たる。しかしながら、この話を単なる虚構として退けることもできない。情報というものはどこかでねじれていくものである。ちなみに国俊の息子の一人猷実(實)は覚猷の弟子であり、この話が事実であるならば、甥は国俊ではなく、その子息あたりを想定してもよい。

この話はひたすら「たわふれ」に終始した話である。それ故に教訓性や評論性をもたない『宇治拾遺物語』という説話集の特徴をよく表わした話の一つであると言える。しかも、登場人物は序文に出てくる宇治大納言隆国(2節参照)の息子とその甥で、磊落な一族の性情に底通するものさえ感じさせ、序文ともつながりがある。

覚猷は知恵を巡らし巧みに仕組んで国俊をだまし、その牛車を乗り回す。だまされたと知ると国俊も負けず劣らず知恵を巡らして報復する。だましだまされる二人の応酬には双方に、身内に対する甘え、そして良く似た頭の回転の速さ、知恵、ひょうきんで奇抜な発想などを認めることができる。それはこの一族の遺伝子に付随するものようである。

特に覚猷に関して言えば、高齢であるという設定にして、子供のような無邪気な我執というものを認めることができるし、また、「はだかに成て、『えさい、かさい、とりふすま』といひて、湯舟にさくとのけざまに臥事をぞし給ける」という、奇妙な湯舟や入浴の習慣は奇行というべきである。総じて、一風変わっていて、自由で奇抜で放逸で、戯れ心・子供心に満ち、イメージネーション豊かで、常識にとられない、そのような人物として覚猷の像を結ぶことができよう。

ところで、『宇治拾遺物語』の説話配列にはゆるやかな連想があることが指摘されている⁷⁾。この話も次の「絵仏師良秀、家ノ焼ヲ見テ悦事」という話との間にいくつかの連想性を認めることができる。絵仏師良秀が、我が家が類焼し、妻子が家に取り残されているにもかかわらず、自宅の焼けるのを見てうなずいたり笑ったりして周囲の者を驚かせた。その理由は年来不動尊の火焰をうまく描けなっていたが、今こそこのように燃えるものだと分かった、というのである。その後「良秀のよちり不動」と人々に賞賛される作品を描いたという。

覚猷の話との繋がりは、共に絵を描く僧であること、そして共に不動尊の絵を描いて有名であることである(4節に記したように、覚猷が不動尊を描いたことが醍醐寺に残る写しで知られ、また後掲の『溪嵐拾葉集』にも異形の不動百体描いたとある)。また、どちらも絵師

としての異能の特徴であろう、常識を逸した奇行が共通する。取りも直さず、『宇治拾遺物語』の編者自身が、そうした共通性を理解していたものと考えられるのである。つまり、本話は絵師としての覚猷には一見触れていないようでありながら、次の話を読むことで、そう言えば覚猷も絵師であって、すぐれた絵師にはこういう常軌を逸した面がある、と読む者に喚起を促す仕組みなのである。

④『古今著聞集』画図395「鳥羽僧正絵をもって供米の不法を諷刺する事」

鳥羽僧正は、近き世にはならびなき絵書なり。法勝寺の金堂の扉の絵書たる人なり。いつのほどの事にか、供米の不法の事ありける時、絵にかかれける。辻風の吹たるに米俵をおほく吹上たるが、塵灰のごとくに空にあがるを、大童子・法師原はしりちりてとりとどめんとしたるを、さまざまおもしろ筆をふるひてかかれたりけるを、たれかしたりけん、その絵を院御覧じて、御入興ありけり。其心を僧正に御尋ありければ、「あまりに供米不法に候て、実の物は入候はで、糟糠のみ入てかろく候が、をかしう候を、書て候」と申されければ、比興の事なりとて、それより供米の沙汰きびしくなりて、不法の事なかりけり。

この説話は絵に関するものである。覚猷が法勝寺の扉絵を描いたという。4節に見たとおり、鳥羽院御願の勝光明院や仁和寺の待賢門院の御堂の扉絵を描く候補に挙がっているので、有り得ないことではない。むしろこのような前例があって、候補に挙げられたと見ることもできる。

さてこの話、供米の不法を、おもしろおかしい絵にしたためたという。ここには明確に覚猷の風刺の精神と、ユーモアや戯れ心を認めることができ、また、その良き理解者が「院」であったことが確認される。『古事談』でも、奇抜な遺言はそのイメージが明らかに戯画であり、風刺画であった。そして覚猷の意図を理解すればこそ、「白河院」は自ら処分を買って出たのであった。この話と『古事談』の話とはきわめて近いと言うべきである。

⑤『古今著聞集』画図396「鳥羽僧正、待法師の絵を難じ、法師の説に承伏の事」

同僧正の許に、絵かく待法師ありけり。あまりに好ならひければ、後ざまには僧正の筆をも恥ざりけり。此事を、僧正ねたましくやおもはれけん、いかにもして失を見出さんとおもひ給処に、或時件僧、人のいさかひして、腰刀にて突合たるを書て、自愛してゐたりけるを、僧正み給に、其つきたる刀、せなかにこぶしながら出たりけり。よき失と思てのた

まひけるは、「わ僧が絵書ながくとどむべし。いかなる物か、人を突に拳ながら背へいづる事あるべき。つかぐちまでつきたるなどをこそ、いかめしき事にはいふを、これはあるべくもなき事也。かく程の心ばせにては、絵かくべからず」といはれければ、此僧かい畏て、「其事に候。これは故実には候なり」といふを、僧正いはせもはず、「わ法師が絵の故実、片腹いたし」といはれけるを、すこしも事とせず、「さも候ず。ふるき上手どものかきて候おそくづの絵などを御覧も候へ。その物の寸法は分に過て大に書て候事、いかでか実にはさは候べき。ありのままの寸法にかきて候はば、見所なき物に候故に、絵そらごととは申事にて候。君のあそばされて候物の中にも、かかる事はおほくこそ候らめ」と、へりもをかすいひければ、僧正理にをれていふ事なかりけり。

この説話によって絵の技法として写実と誇張があったことが明確に知られる。そして覚猷が誇張した絵も多く描いた、すなわち、戯画を描いたことが知られるのである。また、腕を挙げてきた弟子をねたましく思うなど、覚猷は負けず嫌いで、高慢で、まさに『発心集』の説話のように天狗道に墮ちる要素を認めることができる。しかしながら、権威で弟子をねじ伏せることはしない。「理にをれていふ事なかりけり」とあるように、あくまでも道理を重んじる姿勢を持ち合わせ、それもこれらの説話に共通して見られるところである。高飛車に出たものの、やりこめられて黙ってしまうなど言動が滑稽で、子供のような一面を垣間見せている。これも『宇治拾遺物語』の覚猷像に重なるだろう。

⑥古写本⁸⁾『溪嵐拾葉集』「異形不動の事」

師物語云、鳥羽僧正覚猷者天下無双碩学真言師、又画師也、即是不動化身也、此僧正在生之間、異形不動百余尊奉_レ書_レ之、其中非_二普通_一不思議形像_トアリ、中尊不動_ト勢多伽童子_トト合宿_{シテ}出世振舞_シ給_{ヘル}形体_{アリ}比興々々、又云、同画面書_二不動尊_一僧_ノ厠_ニ入_給催_二下痢_一相貌凡如_二世間人_一ノ二童子クサカテ鼻塞体_{アリ}、又云、不動明王僧_ノ厠_ニ入_給劔_ヲ以_テ尻拭_ヒ給_フ風情_ヲ被書也、深秘習事有_レ之、顕密一致、深意有_レ之_ヲ、云々、凡糞穢城厠事、第六天魔王_ヲ降伏_シ給_フ縁起等不動尊_ニ殊_ニ有_レ故事也、此等子細甚深習事アリ、法華云、二十年中常令_レ除_レ糞文事以_テ空觀_ニ除_二見思粉穢_一意也、空觀即秘義也、云々、又云、或行者以_二鳥羽筆不動_一多年令_レ勤行_{ケリ}或時此不動尊示云、此僧正_カ我_ヲ賞翫_{シテ}種々令_レ図絵_ニ然而其ママニ振舞_トスレハヨニ六借_トソトヨ云々、サレ

ハ仏ノ相好ヲ能々可令簡拙者歟、
又云、山門東塔仏頂尾智泉房ニ鳥羽僧正ノ不動アリ、此尊ヲ行者悉令落墜世間、此尊ヲ為レ体全体女形也、サレハ本尊相貌ヲ可奉相者哉、
又云、不動劔ヲウチカタケテ走給フ風情アリ、二童子ヲトラント追テ走ル体アリ、是則定恵ヲ刀ヲ以テ法体ヲ莊嚴スル意也、又云、空仮ノ二辺ヲ以テ中道ノ妙理ニ契当スル意ナリ、云々、

『溪嵐拾葉集』は文保2年(1318)の成立。編者は天台僧の光宗である。覚猷を、天下に並びない学者、真言密教の師、絵師であると紹介している。そして覚猷が異形の不動尊を百余体ほど描いたと言い、ここでは師がそれを教学的に解説している。

異形の不動尊とは、本尊の不動と勢多伽童子と共寝して、男女のような振る舞いをしているもの。不動尊が僧の廁に入って下痢をもよおしているもの、これは表情がおおよそ世間の人のようであり、また二童子(勢多伽・矜羯羅)が臭がって鼻をふさいでいる。不動尊が僧の廁に入って、劔でもって尻をぬぐっているもの。ある行者が、鳥羽僧正の描いた不動尊を掲げて長年修行をしていたが、ある時この不動尊が行者に「この僧正が私を面白いともてはやして、さまざまな絵にお描きになった。けれども絵のとおりに振る舞おうとすると、なんとも難しいぞよ」と言ったという話。また、全身女体の不動尊を描き、これを本尊とする行者はみな世間に墮落してしまったという話。また、不動尊が劔をふりかざして走り、2童子をつかまえようと追いかけてまわしているもの。

これらの不動尊はまさに「異形」であり、稿者はこのような不動尊の絵の存在を聞いたことがない。もっとも「走り不動」なる絵はあるという。こうした絵が教学と関わるとしても、これは戯画と呼ぶべきであろうし、不動明王という仏を人間のように擬人化した絵である。それも多分に卑猥・猥雑な姿態のものである。さまざまな動作行動をしている動的な絵であることも仏画の範疇を超えている。ここにもひょうきんで奇抜な発想が認められる。この「師」はそれを教学に結びつけて解説するのであるが、果たしてそれが覚猷の意図であったかどうか。仏教に精通しながら、常識や権威にとらわれず、むしろそれを無化したところで真の仏教の何であるかを言わんとしたのではないだろうか。

以上、説話における覚猷の人物像はおおよそ矛盾するところなく、一貫した覚猷という人物を浮かび上がらせているように思われる。

まず、高僧としての評価がある。『発心集』に「やむごとなき人」、「行徳高き人」とあり、『溪嵐拾葉集』には「天下無双碩学真言師」とある。また、『古事談』に

は「白河院」、『古今著聞集』には「院」が登場し、院政の主人との結びつきの強さ——ないし彼らが理解者であったこと、こうした点は3節の記録類にうかがえる覚猷の経歴や業績と重なるものである。

次に絵師としての覚猷は、『古今著聞集』では「画図」の項目に入っており、絵師そのものとしての話題である。『溪嵐拾葉集』も絵師としての話で、これは不動明王という仏画を描いたというものである。絵師としては触れていない『古事談』の遺言も戯画をイメージできるし、『宇治拾遺物語』も配列から明らかに絵師としての覚猷の異能性に注目している。そして特徴的なことはこれらの絵がすべて戯画や諷刺画であることである。さらには、そうした戯画の方法として誇張や擬人化といった表現方法を用いたことも知られる。こうした戯画制作者であることは4節の記録類ではうかがえないことであった。しかし、では記録が正しく、説話は作り話かと言うに、説話は逸話として伝承されているものであり、ある意味では記録類が記さない別の面を伝えていて貴重な情報であるということも言えるのである。

人物像としては、常識にとらわれない一風変わった人物で、自由で奇抜で放逸で、戯れ心・子供心に満ちている。また、機転の利く頭の回転の速さや豊かなイメージネーションももっている。しかも、確かに天狗道に墮ちるような、高慢で我執の強い面がある。こうした人格と戯画・諷刺画を描くこととは極めて密接な関係がある。さらには、仏教の真理や道理を重んじる真面目をもちながら、真面目を前面に押し通すのではなく、供米の不法を訴える代わりに絵にしたり、奇抜な遺言など、はぐらかしているような、あるいは超越しているような、そんな複雑な戯れ心の横溢した人物像が結ばれる。

高僧であるとされながら、覚猷の人物像は通常の高僧としてのイメージとは落差がある。しかし、高僧であることと矛盾するわけではない。そこに覚猷という人物の、五つもの説話集に採録されるような、個性や話題性があると見えよう。こうした人物像は記録類ではなかなか見えてこないもので、説話の情報がより人間的な側面を伝えているものと言える。

6. 『鳥獣戯画』(甲巻)との接点

記録や説話から帰納される覚猷の要素と、『鳥獣戯画』甲巻との接点となるものはあるようだ。

まず、説話に見られた覚猷は戯画の名手であることである。すなわち、これは『鳥獣戯画』が戯画であることにより接点となる。しかも、不動明王さえ擬人化したというのであるから、動物を擬人化して描くことも接点となるであろうし、実物の大きさを変えて誇張法を用いる

というのであるから、その点でも、大きさの相違する蛙・兎・猿などの動物をすべて同じ大きさで描くという誇張法も共通する。

また、『鳥獣戯画』甲巻の絵柄として、兎が川に背面飛び込みをする場面があるが、『宇治拾遺物語』に見られた覚猷の奇行、湯舟に「おどり入りて」「さくとのけざまに臥す」すなわち背面飛び込みという動作は、覚猷自身の動作であり、絵のモチーフにすることも考えられる。また、その湯舟に飛び込むとき、「えさい、かさい、とりふすま」と言ったというが、「とりふすま」は鳥が臥す所、すなわち藁を入れた湯舟を鳥の巣に見立てたものと推測され、「鳥獣」に対する関心の一端を垣間見ることができるとも言える。さらには仰向けにひっくりかえって気絶している様は、『鳥獣戯画』の印地打ちの場面で、石に当たってひっくり返った蛙の状態にも通い、覚猷の行動自体が『鳥獣戯画』的要素を含んでいる。

『鳥獣戯画』の印地打ちには、兎が剣の代用である葦の茎を頭上にふりかざして猿を追いかける場面があるが、これは覚猷が描いたという、不動明王が「劔ヲウチカタケテ走給フ風情アリ、二童子ヲトランド追テ走ル体アリ」という、童子を追いかけて回す動作に似る。

『鳥獣戯画』における法会の場面は、一見、動物たちの無邪気な法会ごっこに見えるが、畜生道という苦界にいる動物たちであることを思えば、動物たちの往生祈願という、非常に重い意味をもつ。猿の導師が気焔をあげて（口から出る息、ないし声の線が描かれている）経を唱えているが、覚猷が導師として活躍したことは先に見たとおりである。院や関白といった尊貴者ならぬ動物を対象として往生を願う絵を覚猷が描いたとするなら、それは仏教が権力者に委ねられ自分がそれに奉仕していることを本当は肯定していないことを意味し、仏教の遍在的救済を動物にまで及ぼせる意図があったことになる。作者が覚猷であったなら興味深いところであり、奇抜で独創的な発想をする覚猷ならそれも可能であるとも思う。

また、法会を終えた後の布施をもらう場面では、猿の導師はたくさんの食事や布施を前に、その表情がにんまりと笑みを浮かべているように見える。『鳥獣戯画』は全体に戯画ではあるが、動物が可愛く描かれており、諷刺画ではないと見るべきである。しかし、この場面だけは、少々、導師の物欲という諷刺を見ることができるものと思われる。自ら導師を多く務めた覚猷が作者であるならば、こうした法会における導師のありようを、自らを含めて批判的に考えていたのであるか、とも思われる。

また、説話に見た覚猷の人物像を前節の最後にまとめたが、それらは、「はじめに」で挙げた拙稿が読み解い

た『鳥獣戯画』甲巻の、鳥獣が人間のように遊ぶという戯画に、さらに重層的に一場面一場面に戯画を仕組んだ、独創的で機転やユーモアに満ちた発想をする作者と結びつくであろう。あるいは法会の絵などには、真摯な仏教徒としての覚猷の本心をうかがうことができるようにも思われる。前稿で『鳥獣戯画』甲巻の作者像を、

作者にとっても遊びは、日常生活から隔離された時間・空間の中で自由に、楽しく、美しく遊ばれ、また、物質的利害や生活の必要の外にあるため、俗界を超えた美と聖の世界ともなり得るものではなかったか。作者はそういう遊びに共感し、意味を認めていたのではないだろうか。これは現実の写しでも、また、虚構でもなく、現実社会や世俗的価値観を超えたもう一つの世界、すなわち遊びが遊びとして自立する世界なのだ。作者は独創的、かつユーモアにあふれた発想の持ち主であると同時に、脱俗的な志向性を有する人物でもあるのではないだろうか。

とまとめたが、動物が種を超えて、日常の時空を超えて楽しく遊ぶという理想郷を空想した人が覚猷であってもよいように思える。

覚猷に醍醐源氏の一族というプライドと撰関家に対する屈折した意識はなかったのか、40代・50代の尋常ならざる籠居と沈黙は何を意味したのか、その後の処世や、異常なほどの高位・要職の歴任は、あたかも何かを吹っ切ったような感もあるが、心中に去来するものは何だったのか、比叡山延暦寺と三井寺との抗争を背景に、三日で座主を辞めたことに何を感じていたのか、自らが高位・要職にあればあるほど、僧俗の物欲・権力欲はどのように覚猷の目に写ったのか、そして白河院といった権力者の死を看取って何を感じたのか、そうした諸々の現実に対して、覚猷にさまざまな思いや批判精神があったとすれば、直接語ることではなしに、戯画はその表現としてふさわしい手段であるとも言える。単なる批判や諷刺という面のみでなく、理想郷の姿を描くことも戯画をもって可能となるであろう。覚猷が『鳥獣戯画』甲巻の作者であるなら、それは格段に陰影深いものとなる。

しかし、覚猷が『鳥獣戯画』甲巻の作者であるか否かを判定する意図はない。ただ、覚猷と絵巻の作者が極めて近い人物像を結ぶということは言えるのであり、それは撰関政治が終わりを告げ、12世紀院政期という時代を背景にした特徴的人間像であるのかもしれない。

注

- 1) 『芸術世界』11号、2005年
- 2) 『古代文化』34号、1982年
- 3) 渋谷慈鑑編、第一書房、1973年

- 4) この「大師」を小松茂美は弘法大師空海とする（『日本の絵巻 6 鳥獣人物戯画』解説、中央公論社、1987）が、智証大師円珍とするべきである。
- 5) 『仏教芸術』36号、1958年10月
- 6) 益田勝実「抄録の文芸」(1)～(3)『国文学解釈と鑑賞』31巻3～5号、1966年2～4月
- 7) 益田勝実「中世的諷刺家のおもかげ—『宇治拾遺物語』の作者—」『文学』34巻12号、1966年12月。小林保治『宇治拾遺物語』解説、桜楓社、1976年。小出素子『『宇治拾遺物語』の説話配列について』『平安文学研究』67号、1982年6月
- 8) 禿氏祐祥「鳥羽僧正覚猷の戯画に関する一史料」(『国華』504号、1932年11月)が紹介した。